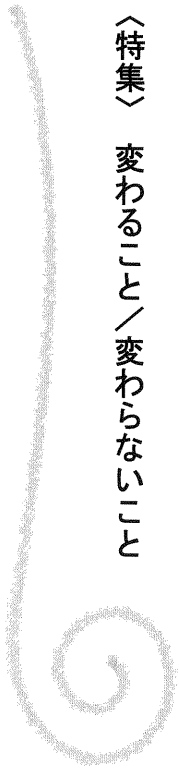
〈特集〉　変わること／変わらないこと



至極当然のことであるが、同じ空間でも時間を経ることで変わることもあれば、同じ時間でも空間を動くことで変わることもある。そして、インターネットや輸送システムが発達した昨今に限らず、日に日にスピードアップの一途を辿る伝達手段や交通手段の中で、遠い先や長い先にある時間や空間を、私たちの近くに寄せることで、日常の生活は便利となったことは確かである。ただ、その便利さゆえ、知らず識らずのうちに、二十四節気や七十二候のような季節や気象の変化を感じる機会を逃すことも少なくなり、電車や飛行機で点と点を結ぶように移動した先でもいつもと同じような生活を送ることはなんら難しくなくなっている。誰もが子どもの頃、自分ひとりでは行けない場所がある中で、その境界のあちらへ足を運んだ時に身体全体を研ぎ澄ませたあの胸躍る感覚は、古来より若い人に許された特権である。

私は、高校三年生の冬にはじめて大学の門を潜ってから、あっという間ではあるが、既に二十七年も同じキャンパスに通っている。入学当初は、その日、その時に体験する空間にしか実存を捉えることができず、過去へと過ぎ去っていく時間に依って世界を捉えていくことはできなかった。その後、学年進行に従い、自分の好奇心の赴くままに、数日後の〆切に向けて昼夜を忘れてがむしゃらに過ごしたり、すぐには達成し得ない内容の度重なるトライアンドエラーからの発見を楽しみに数ヶ月の月日で研究に勤しんだりと、今思えば、工学系の学生に多いのかもしれないが、あまり長い射程で世の中を捉えることなく、今を過ごしてきた。教員として着任してからは、逆に、カリキュラムに基づく一年の周期での行動と思考が続き、次第に、中長期の周期での生活を過ごしてきた。毎日通う大学という空間が同じであっても、時間が変わっていくことで、世の中の捉え方は、広くなったのか狭くなったのか困惑することもある。昨今は、自分も同じ教室で同じ表情で身をおいていた現役の学生を見る度に、時間の概念に引っ張られないからこその思い切った、その日その時を一生懸命にものにしようとする若き学生に、タイムトリップしたいような不思議な感覚に囚われつつ、強い羨ましさを感じるようにもなってきた。彼ら彼女らを、過去に正しいとされた事柄のみが掲載された一般的な教科書の世界に留めずに、教員自身も常に彼ら彼女らの時間と空間の経験に寄り添

いつつ、創造的な視座に共に立って、彼ら彼女らが自らの未来に向けた新しい教科書を創りあげていくような教育と研究の場を提供してくことが、長い人類の歴史からしたら非常に短い時間の差でしかないが、少しだけ先に生まれた人のできることである。

一方で、時に、長い射程に基づいて世の中の事象を考察していくことも、個人であれ社会であれ、学びとして得ることは多い。身のまわりで起きている事象をそのままに認識することは容易くなってきているが、その事象の中で、その仕組みや因果関係といったメカニズムのレベルで紐解いて論考していくことは、時に、人類にとって、今はまだ見ぬより創造的な視座を獲得する絶好の機会でもある。

今号の特集は、企画を考えはじめてから刊行するまでが、ちょうど、新元号への移行の年にあたることから、私たちの身のまわりの事象に向けて少しでも遠い先や長い先への射程に目を向ける機会ともなるように、「変わること／変わらないこと」をテーマとした。この方のお考えを伺ってみたいと私自身がリストアップした年初のメモには、今回にご寄稿いただいた、食、教育、運動、統計、コミュニティの各分野以外に、政治、経済、工学、生活、建築、研究、大学、キャンパス、ファッションといった分野とお名前が記してある。全ての方からのお考えを伺いたい気持ちは山々であるが、今号の厚さが約三倍となってしまうことか

ら、それは次号以降のどこかにてお願いすることとし、今号は、私たちが日常の生活の中で経験している、もしくは、経験したことのある、より自身の身辺に近い事象に的を絞ってご執筆いただいた。ここにあらためて感謝申し上げる。

この特集を通して、常に進行している時間と常に生活している空間に秘められた人類の営みのメカニズムの数々を読み解いていただき、読者の皆様が、日々の生活にいつもと違う逆照射された光をあてて論考を深めていただけると幸いである。

北川　啓介

Some Things Never Change / Some Things Ever Change: Introduction to the Special Section

Naturally, some things change over time even in the same space and some things change by moving through the space in the same time. This secial section tries to shed a new light to mechanisms of human activities in daily lives from the viewpoint of eating habitat, education, gymnastics, statistics and community.

北川啓介 | Keisuke KITAGAWA
名古屋工業大学大学院工学研究科
建築意匠・建築計画
教授